

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 4 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520032

研究課題名(和文)

ヨナス哲学の展開と統合 ―グノーシス、生命、未来世代、神―

研究課題名(英文)

The evolvement and integrity of Jonas' philosophy: Gnosis, life, future generation, and God

研究代表者：品川 哲彦 (SHINAGAWA TETSUHIKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：90226134

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：哲学・哲学倫理学

キーワード：倫理学、哲学、宗教学、責任、未来世代

1. 研究計画の概要

本研究は、ヨナス(Hans Jonas1903-93)の思想的経歴をたどり、少なくとも四期に分節されるその展開の統合的な理解を目的とする。ドイツ生まれのユダヤ人哲学者ヨナスは、Heidegger, Bultmann の指導を受けた後、ナチスの政権掌握のため渡英し、グノーシス思想についての著作によって研究者としてのキャリアを開始した。その後イスラエルに移り、従軍し、1949年にカナダ、55年に米国へ移住してからは、生命(有機体)の哲学を展開し、生命倫理学の研究拠点であるHastings Centerの一員となった。未来世代の存続のために現在世代には地球規模の生態学的危機を回避する責任があるという『責任という原理』(1979)によって名声を高め、晩年は、自ら創造した宇宙に宇宙自身の運命を委ねた「無力な神」と宇宙の進化とを主題とする神学的宇宙論を展開した。一見したところ連続性を見出しがたいその思想遍歴のなかに連関を見出し、個別に論じられがちな彼の成果(グノーシス研究、有機体を自由な主体として位置づける生命哲学、人体実験や脳死判定基準やクローン人間に関する生命倫理学への寄与、生態学的危機への警告と未来への責任、神、宇宙生成論)を彼自身の文脈のなかで関連づけることが、本研究がめざす目標である。すなわち、(1)四期にわたる思想の展開の統合的な理解の提示、(2)各期それぞれのいっそう深い解釈の提示が本研究の目標である。

2. 研究の進捗状況

上に記した四期のうち、本研究を開始する時点で、研究代表者は責任原理と生命哲学についてはすでに言及したことがあり(品川哲彦『正義と境を接するもの―責任という原理とケアの倫理』、ナカニシヤ出版、2007年)、また、グノーシス研究と責任原理についてのヨナスの代表的な著書の邦訳が出版されていたこともあり、本研究はまず、目標の(1)についての大まかな見取り図の提示とともに、目標の(2)については、これまで日本で紹介されることの乏しかった神学的思索に焦点をしばって研究を進める計画を立てた。

(1)については、ヨナスの生涯の伝記的総括(ヨナスの場合、ナチズムから逃れてのドイツ出国、ナチスへの抵抗のための第二次世界大戦での英軍への志願とイスラエル独立に起因するパレスチナ戦争による八年間の従軍を経て、ようやく四十代後半に大学専任職を得るので、伝記的総括も研究の重要な要素である)を論文「ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念(一)―ユダヤ人で哲学者であること―」(2008年)にまとめた。

(2)の神学的思索については、論文「ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念(二)―全能ならざる神と人間の責任―」(2009年)にまとめた。さらに、神学を主題とする彼の晩年の論文を訳出した『アウシュヴィッツ以後の神』を法政大学出版から2009年に刊行し、上記の二つの論文を加筆修正のうえ、解説として同書に収録した。

同書は朝日新聞、週間読書人等で書評を得、研究代表者は2010年に名古屋哲学会、宗教倫理学会、実存思想協会・ドイツ観念論研究会でヨナスの思想に関する講演を行った。また、2011年3月には、ドイツの研究者との意見交換を図るために、ヨナス研究の中心拠点であるベルリン自由大学ハンス・ヨナス・ツェントラムが編纂中の10. EWD-Diskursに「全能ならざる神と人間の責任」を加筆修正

のうえ独訳し、寄稿した。

このほかに、2010年には、日本におけるヨナスの受容を論じた W・ラフルーアの論文に対する批判を論文「ヨナスは、なぜ、いかにして日本に『積極的に受容』されたか—ラフルーアの解釈と日本からの応答」にまとめた。これについても、欧米の研究者が読解可能なようにすでに英語に訳しており、電子ジャーナル *Journal of Philosophy of Life* に掲載し、その後に研究代表者のサイトでも併せて公表する予定である。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

2に記したように、当初立てた目標(1)には到達でき、目標(2)については神学的思索に限って成果を得た。それらの成果を提示した訳書『アウシュヴィッツ以後の神』は、本研究の中間的な成果発表という意味をもつ。したがって、2008-2009年度は計画通りに順当に研究が進捗していた。しかし、目標(2)のなかの(神学的思索に先立つ)三期それぞれの深い解釈はまだ論文にまとめることができないでいる。これは、とくに初期のグノーシス思想および聖書研究が、研究代表者のこれまでの研究領域の範囲を超えており、当初の見込みほど研究が進捗していないためである。

4. 今後の研究の推進方策

最終年度にあたる2011年度中に、聖書研究およびグノーシス研究の段階に焦点をしばった論文を作成することが第一の目標である。それとともに、できるかぎり、生命哲学または責任原理に関する研究の成果を論文にしたい。だが、当初の計画調書に記した本研究終了後に著書の形で研究成果を公表することをめざすという最終目標の達成はかなり困難であるので、2010年秋に「ハンス・ヨナスの哲学の統合的かつ重層的な理解の構築」と題して、2011年度を含めて3年間にわたる基盤研究(C)を申請した。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 品川哲彦、「価値多元社会における倫理、形而上学、宗教」、宗教と倫理、査読無、11号、2011年10月刊行予定。
2. 品川哲彦、「ヨナスは、なぜ、いかにして日本に『積極的に受容』されたか—ラフルーアの解釈と日本からの応答」、京都大学宗教学研究紀要、査読無、7号、2010、49-64。
3. 品川哲彦、「ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念(二)—全能ならざる神と

人間の責任—」、関西大学文学論集、査読無、58巻4号、2009、1-24。

4. 品川哲彦、「ヨナスの〈アウシュヴィッツ以後の神〉概念(一)—ユダヤ人で哲学者であること—」、関西大学文学論集、査読無、57巻2号、2008、1-23。

[学会発表] (計5件)

1. 品川哲彦、「価値多元社会における倫理、形而上学、宗教」、宗教倫理学会大会シンポジウム「宗教倫理と倫理学」、2010年10月2日、キャンパスプラザ京都。
2. 品川哲彦、「ハンス・ヨナスのアウシュヴィッツ以後の神概念」、実存思想協会・ドイツ観念論研究会(共催)第19回シンポジウム「20世紀の宗教哲学を再考する」、2010年10月3日、同志社大学。
3. 品川哲彦、「Hans Jonas との対話—グノーシス、生命、未来倫理、アウシュヴィッツ以後の神」、名古屋哲学会、2010年1月9日、南山大学。
4. 品川哲彦、「アウシュヴィッツのあとに、神を考えうるか—哲学者ハンス・ヨナスの思索—」、大谷大学西洋哲学・倫理学会春季大会、2009年6月25日、大谷大学。
5. 品川哲彦、「ハンス・ヨナスの《アウシュヴィッツ以後の神》概念」、関西大学哲学会春季大会、2008年6月28日、関西大学。

[図書] (計1件)

Hans Jonas (著)、品川哲彦 (訳・解説)、アウシュヴィッツ以後の神、法政大学出版局、2009、総頁数224頁。

[その他]

研究代表者のウェブサイト
<http://www2.ipcku-kansai/~tsina/>